Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

保育者行動における身体知の重要性
－幼児の異文化適応の可能性をめぐって－

具　守　珍
（日本女子大学院）

はじめに

文化間移動は現在の国際化社会の一つの特徴とも言える。日本も外国人労働者や留学生が急増し、もはや多文化社会を迎え、教育現場にも外国人子どもへの対応という新たな問題がもたされる。1999年の『保育学研究』のテーマが「幼児の多文化教育」であったことも、このような現状への反映である。日本における異文化研究は1970年代以来、数多く行なわれてきたが、幼児を対象にした研究の歴史は浅い。それに保育原理に基づいて保育実践を考えた研究は数少ない。外人であっても対象が幼児である以上、同じ保育原理の延長線上から保育のあり方を問わなければならい。

人がある社会のもつ独特の文化を体得するには、臨界期があるとし、箕浦（1991）は9歳から14歳が文化文法体得の臨界期であることを明らかにしている。9歳以前に違う文化圏へ移行した場合、行った先でそこの一般的な行動パターンをあまり抵抗なく受け入れる。つまり、幼児期に来日した子どもは、あまり違和感をもたなく日本の幼稚園に適応していくことになる。

そうだとすると、異文化に置かれた幼児が抱える問題とは、幼稚園の文化と家庭の文化が連続していないことにあるのか。家庭の中では、成人してから文化間移動をした親により自文化（親の）が生きている。一方、幼稚園では日本の文化が使われ、その二つの文化の狭間に置かれた子どもは戸惑いを感ずるだろう。しかし現代社会は、省力化、自動化、食文化・住文化のグローバル化により、生活の共通性が拡大している（マックドナルドは世界どこでもある）。また、家庭における構成員の役割行動の個別化―親は会社（グローバル化）、子どもは学校（近代学校の共通化）―そして情報化（TV，パソコングローバル化）がこの傾向を加速化させ、人の生活を均一化していく。これは文化間移動をしても住みやすくなる意味でもある。こうなると、自分の出自としてのアイデンティティだけが問題に残る可能性を江淵は指摘する。

しかし幼児の場合、アイデンティティという問題は親の方の心配ではあっても、まだ子どもが直面する問題ではない。そうだとすると、外国人の子どもが日本の幼稚園に適応するのに最大のネックは言葉ということになる。子どもは言語獲得が早いと言われ、保育者の話ではだいたい３ヶ月かかるという。でもそれは、片言葉を投げる程度のもので、自分の言いたいことが言えるには少なくとも半年以上はかかる。では、幼児の場合、ことばというネックが異文化適応にどのくらいの障害になるのだろうか。それは保育の質と深い関係をもつのではないか。

という疑問から本研究では、日本滞在の外国人の中で大きい割合を占めるアジア系子どもへの観察を通して、それを検討したい。

研究方法

新宿区の区立幼稚園Ｕ園で、来日したばかりの韓国人と中国人の子どもを中心に観察を行った。記録おこしやビデオを使って半年間、週一回ペースで行った。

事例

事例１

砂場で焼き芋をする日。5歳クラス全員が砂場の回りで先生たちが火をつけるのを見ている。炎をみてみんながぎゃーぎゃー騒いでいる。日本語が片ことばしかできない5歳のS男（韓国）もはじめてみた風景に興奮して、炎を指差しながら「オーイ、オーイ」「みんな、オーイ、オーイ」と。どなりで一緒に見ていたU男が、両手で下を叩きながら「どーんどん　もえろう、どーんどん　もえろう」を繰り返す。すると、S男も横並びで同じ姿勢をとり、同じ動作をしながらそのリズムに同調して「どーんどん　おえよ、どーんどん　おえよ」を繰り返す。

事例２

来日2ヶ月を向かうY女（4歳、韓国）。登園して、ロッカーに荷物を入れた後、保育室の中をうろうろしながら他の子どもの様子を見る。すでに保育室のなか

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

では、他の子どもたちがカルタ遊びやママごとなどで遊んでいる。制作テーブルにはS女が立ったまま、色紙で何かを作っている。Y女はそのテーブルにすっと入り、棚から道具を選ぶ。紙や色テープを取り出して他の子どもの遊びに目を向けたりしながら、制作をやりはじめる。一つの作品を作ってからまたぶらぶらする。しばらくして「おーかーたーづーけ！」と何人かが大声でいう。それを聞いてY女の動きが早くなり、自ら積極的に片付けに参加する。

事例3

片づけの後、保育者がテープレコーダをかけると、音楽とお話が流れる。みんながそのリズムにあわせ、背中を伸ばして歩いたり、体を縮めて歩いたり、その歌詞のどおりに体を動かす。先ほど、女の子たちのちょっとしたトラブルで機嫌が悪くなり、ロッカーの隅にずっと立っていたY女。先生がY女の手を握って誘うとその遊びに入る。歌詞は理解できなくても、音楽の雰囲気や周りの様子で動きがわかり、笑いながらその遊びを楽しむ。

事例分析

事例から分かることは、まず、リズムや体操のように身体性が高い遊びが、外国人子どもにとって参加しやすいということである。言葉にしてもリズムに乗せたことはかけが同調しやすいのは、日本人の子どもにしても変わらないが、ことばが通じない外国人の場合はなおさらのことである。ただ「おかたづけ」というより、パターン化されたリズムに合わせて「おーかーたーづーけ！」というほうが同調を起こしやすいのである。事例1のようにS男は「どーんどん、もえろう」の言葉の意味は理解できなくても、横並びのY男の体の動きやことばのリズムに自ら同調し、その遊動の楽しさを味わう。日本語の発話は「どーんどん、おえよ」と、すこし間違ってはいるが、この場でそれば問題にならない。S男の同調にY男も逆影響され、二人で顔を合わせながらそれを繰り返す。事例3でも、流れるうたの歌詞は理解できなくても、そのうたの雰囲気や周りの動きに自分の体を同調させることはできる。

これは、人間の身体が共通のシステムをもち、共通の感覚をもっているからこそ可能なことである。中村はこれを共通感覚で説明しているが、身体的同調性が高い遊びというのは、人間が持っている共通感覚に注目する遊びにほかならない。

言葉が通じない子どもにとって自由遊びの時間は居場所がさがせなく、うろうろすることがよく見られる。しかし、毎回繰りかえして行われる活動に対しては、行動予測が可能なので参加しやすくなる。たとえば、お片づけやお弁当時間などが代表的である（事例3）。規則性、習慣性、生活感覚の延長線上で遊びの場をつくることが子どもの異文化適応を促す。

製作コーナーがもつ有効性

異文化保育の一つの可能性としてもう一つ考えられるのは、小川のいう製作コーナーである。言葉が通じない外国人の子どもは、保育者が直接関わらないと、遊びグループに入るのはなかなかむずかしい。この場合、外国人の子どもが一番入りやすいところは制作コーナーである（事例2）。その理由は、言葉が要らなく、人間関係を結ばなくても済むからである。もちろん保育者や他の子どもたちとの関わりもあるが、それは副次的な問題で、基本的には一人でものと向かう場である。そして、勝手が分かるように道具が置かれていて自分のイメージで作業ができるからである。

小川はそこに保育者が座ることによって、保育者には自分の拠点として、こどもには安定を求める場として制作コーナーの意味を強調している。この論は外国人こどもの保育においても有効性をもつと思う。事例3のように、自分の居場所が探せない自由遊びの時間、先生のいる製作コーナーで、ものと関わりながらまた、保育者や他の子どもとの関わりをもちながら安定が求められる。その場でものを媒介にしイメージを共有した中で出てくることばを習得していくことも考えられる。そして、そこからまた他の遊びへ広がることが考えられる。

結び

以上、日本語が通じない幼児の異文化適応の可能性として、身体的同調性や応答性が高い保育、そして規則性のある生活感覚の保育が求められる。その具体的な実践として製作コーナーは有効性をもつ。ことば中心ではなく、環境中心の幼児教育の基本原理に基づいた保育を行うことこそ、外国人子どもが参加しやすい、より早く安定感を取り戻す保育に繋がるだろう。

参考文献

江淵一公　異文化間教育序説　1994、九州大学出版社
箕浦康子　子供の異文化体験、1991、思索社
小川博久　保育援助論、2000、生活ジャーナル
中村雄二郎　臨床の知、1992、岩波新書

NII-Electronic Library Service